

## 国際交流プロジェクト ベルリンワークショップ

井上裕依子 INOUE, Yuiko  
武蔵野美術大学大学院 1年（高橋スタジオ）

卒業制作を終えて大学院へ進学すると直に、埼玉建築設計監理協会主催の卒業設計コンクールで賞を頂き、副賞として海外研修旅行の機会を得ることができました。そこでどこに行こうかと思い巡らせていたところ、武蔵野美術大学の協定締結校であるベルリン芸術大学とアテネ国立美術学校との合同ワークショップの話が舞い降りてきました。内容は彫刻学科の教授と学生でドイツへ行き、立体物を制作するというものでした。学部から考えてきたテーマを卒業制作でまとめ、大学院では同様のテーマをより深く追求しようと思っていた私にとって、その時期は私自身の考え方、やり方などを整理する必要のある貴重な期間でしたが、環境を変えて制作する事は、様々な人に私自身の考えを投げかける良い機会になる事と思い、私はワークショップに参加することを決めました。

ワークショップは、ベルリン市内にある大学本部と、60キロ離れたザウエン村という旧東ドイツにある施設の2カ所で、素材を変えながら2回に分けて行われました。ホスト



ザウエンのアトリエでのプレゼンテーション  
（写真提供：井上裕依子）

校のベルリン芸術大学では、多国籍の学生が大勢学んでいて、今回のワークショップもコロンビアやポーランド、そして中国や日本からの留学生が参加しました。また、アテネ国立美術学校のギリシャの生徒、武蔵野美術大学からはシンガポールの留学生も参加し、国際色豊かで、とても活気に溢れたものとなりました。

初日は、オリエンテーションを兼ねてダーレム博物館へ行き、ポリネシアン美術のコレクションから彫刻の様々な表現を学ぶ事で始まりました。様々な民族の暮らしに使われる道具・儀式で使う楽器や衣装などを見て、人間が身につける物の形態の美しさにとても感銘を受けました。実施期間の前半は、ベルリン芸術大学の石彫場で石灰岩を用いた制作を行いました。ベルリンはどこに出向いても、新しいデザインや情報が手に入り、特に毎日新しい人との出会いに恵まれ、刺激のある環境でした。様々な物事から影響を受け制作を進める事は、私にとって貴重な体験でした。また普段とは異なった表現を手探りしながら、制作することができたと思います。

後半は、ザウエン村で参加者全員が共同生活をしながらの制作となりました。ザウエンは、木々の揺れる音、羊や馬の鳴き声、教会の鐘の音だけが聞こえる、とても長閑な環境でした。ドイツ料理を食べ、会話を楽しみ、アトリエや庭で自由に制作する。時には芝生の上で寝ころびながらアイデアを考える。といった具合に、ベルリンの生活とは一転して、時間に余裕を持って過ごしていました。自ずと普段の考え方・やり方を素直に持ち出し、制作を進めることができました。ポートフォリオを使い、作品を通して出来るだけ多くの人と会話した時間が、今では一番貴重な事となったような気がします。

興味を示して下さる先生や友達に話す他に、中間・最終プレゼンテーションの場があ

りました。そこではできるだけ簡潔に整理して伝える必要がありましたし、外国語を使い異文化の中でそれを行うことは、私自身の考え方を見直す良い機会となりました。

今までに他国に出向き、様々な物を見て影響を受けた経験は多々ありましたが、このワークショップでは、環境を変えて制作することで異国の人とお互い共感し、理解出来ることを喜ぶことができました。

また、理解出来なくてもその差異が何であるのかを考えることの大切さや、その差異こそが価値なのだ気付けたことに大きな意義がありました。今後建築を続けるにあたり、重要な出来事になったと思います。

### 編集後記

◎今年も様々なトピックが集まりましたが、アート、環境、国際交流等、建築と他の領域の新しい関係性を考える上で興味深い活動をご報告できたかと思います。いかがでしたでしょうか。ご意見、ご感想をお待ちしております。

◎フォルマ・フォロ編集部では、皆様のプロジェクトや活動を、幅広くお伝えしていきたいと思っております。興味深いトピックがありましたら、以下の連絡先に是非お知らせください。（自薦他薦は問いません）  
宛先：森大樹（日月会事務局）  
turner@daiju.org

フォルマ・フォロ  
Vol.9 2008.12.1

編集：坂本和子、青山恭之  
デザインフォーマット：矢萩喜徳郎

印刷：株式会社 帆風  
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会  
東京都小平市小川町1-736  
武蔵野美術大学建築学科研究室内

## クリエイティブ・ファシリテーター型の建築家

田中 陽明 TANAKA, Haruaki  
26 回生 春蒔プロジェクト（株）代表取締役  
／co-lab 運営代表

私は現在100名程のクリエイターのためのシェアオフィスを運営しています。そこを拠点としてクリエイティブ・ファシリテーターという立場で、様々な分野の会社のブランディングに協力し、平面から立体、建築、メディアやWEB、映像などにおけるデザインの提案を総合的に行っています。建築設計を出発点とし、なぜこのような活動をしているのか。その理由を大学卒業から現在までの道のりを辿りながら、説明したいと思います。＜バブル崩壊とインターネットの創成。そして、建築からアートへ＞

バブル景気が弾けたのは、ちょうど私が武蔵美を卒業する年でした。就職活動をしていた私は、先の見えない長い不況の時代に入ることに備え、安定感のあるゼネコン、大林組の設計部に入社しました。大企業に日本社会の縮図を見ながら、その一員として働く内に、カタチを追求する建築ではなく、建築を通して社会に直接的なメッセージを発信するための新しい表現方法を模索するようになりました。その頃インターネット創成期と時期を同じくして、慶応大学が湘南藤沢キャンパス（SFC）を新設し、この新しいメディアの研究を盛んに行っていました。私は大林組から慶応大学SFC研究所に移り、探していた新しい表現方法を見つけるべく試行を続けていました。そのような中、私の活動を大きく方向づけてくれたのが、メディアアートとの出会いです。ITを介在させることで、空間のデザインのみならず、環境全体を視野にいれた新しいコミュニケーションの可能性があるのではないかと気づかせてくれたのです。そ

こで大学院に入学し、メディアアートを専攻することにしました。大学院生になってからは、flow というメディアアートユニットを結成し、国内外の様々な現代アート展や科学展に出展することで、新しいコミュニケーションの形を更に追求することになりました。＜アートで問題提起し、建築デザインで問題解決する＞

大学院を卒業した後も作品制作を続けていました。アートという異なる分野に移ったことは大きな挑戦でしたが、建築がバックグラウンドであるからこそ、気をつけていたことがあります。それは、建築設計の中にメッセージを込めることで、建築の機能を犠牲にしているのか。その理由を大学卒業から現在までの道のりを辿りながら、説明したいと思います。＜バブル崩壊とインターネットの創成。そして、建築からアートへ＞

当初は漠然としたこだわりのようなものでしたが、活動を続けていく内に一つの確信に変わっていきました。『アートには問題提起する力があり、建築、デザインにはその問題を解決する役割がある』。アートとデザイン、この二つがもつそれぞれの力を使い分けて、一貫したプロセスとして活動をしていくことで、社会と直接関わり合い、一つのメッセージを発信していくことが出来るのではないかと考えるようになったのです。

この思想をもって発表した作品の一つに、とから国際現代アート展「デメーテル」（2003年／帯広）に出展した「nIALL プロジェクト」があります。建て売りの郊外住宅が織りなす日本の風景を問題として、その風景を象徴する様々なパーツを組み合わせた建築中の家とも見えるようなインスタレーション作品を発表するとともに、その先は壁紙メーカーと協力して、日本オリジナルの壁紙をデザインするというプロジェクトを立ち上げました。



nIALL プロジェクト（写真提供：田中陽明）

このように「風景のリノベーション」と題したシリーズでは、海の家、ルーフトップハウス、暗渠、公園、郊外住宅、オフィス等、様々なソフトアーバニズムに関するプロジェクトを展開してきました。作品制作を重ねる内に、「アートで問題提起、デザインで問題解決」という方法論が効果的であると実感すると共に、「デザイン」といっても、特に建築家にとっては形や機能のみの提案だけではなく、その場所で発生するコミュニケーションをも視野に入れたものでなくてはいいないと思うようになりました。そのような中で、オフィス風景に対するプロジェクトとして立ち上げたのが、クリエイター専用のレンタルシェアスタジオ co-lab（コーラボ）です。＜建築家として、コミュニケーション空間を実体験するために＞

co-lab（コーラボ：場の総称）とは、クリエイターがそれぞれ占有のスペースを借りることができ、さらに共有の会議室やITインフラ、作業用のワークショップなどを備えたプラットフォーム型のオフィスです。ハード（建築）とソフト（コミュニケーション）の双方をデザインしたいという思いから立ち上げたプロジェクトで、場所を固定しない現代の働き方に合わせて、次世代型のオフィスを提案しています。その為には建築家がソフトを実体験することが重要だと考え、私自身

が実際に場の運営に携わることで、コミュニケーションなオフィスのあり方を研究しています。

グラフィック、執筆からWEBや建築まで、現在100名の様々なジャンルのクリエイターがブース単位で居を並べ、長屋のような形式で仕事をしています。このような環境に置かれているため、日々の交流の中から新しい仕事が発生し、様々なコラボレーション・プロジェクトが成立するのです。私の会社（春蒔プロジェクト）は、そのフラットな関係の場を活かして、クリエイティブ・ファシリテーターとして、ディレクターのように指示するのではなく、プロジェクトに関わるクリエイターの能力を引き出しながら組み立てていくという役割を担っています。

つまり co-lab とは、独立系のクリエイティブ業種のためのレンタルオフィスであるだけではなく、クリエイティブ・ファシリテーターを有するクリエイションシンクタンクという形態をとっているともいえます。それは一つの固定した形態ではなく、プロジェクト単位で変化していく有機的な組織体で、平面から立体、空間、建築、ウェブ、映像、文章などあらゆるクリエイションを受注し、トータルに応えることができるシステムをもっているのです。このため様々な職種の企業のデザインを取り入れたブランディングに対応することができ、ジュエリーからニット工場など多岐にわたるプロジェクトを、co-lab メンバーを中心に構成されたプロジェクトチームに任せています。



co-lab 三番町 外観  
（写真提供：田中陽明）

これまで co-lab 全体としては主にプロジェクト単位での活動を行ってきました。次のステップとなるのは、この有機的な組織体としての可能性を更に活かしながら、全てを満たすシンクタンク機能を確立することです。そして雑誌・WEB等の独自の媒体をつくることを始め、知財の管理や制作物のクオリティコントロールなど、co-lab 全体でメッセージを発信し、仕事を受注し、問題を発見して解決していける総合的な生産システムを創っていきたいと考えています。現在その実現に向けて、具体的に準備を始めているところです。＜「指示する」から「引き出し合う」建築家へ＞

建築家の役割とは本来、物事を総合的にまとめいくことではないでしょうか。かつて「総合芸術」と呼ばれた建築に携わる現代の人々は、デザインの職種が細分化するにつれて、設計者として限定された役割に留まらざるを得なくなってしまったように思います。しかしITの普及やグローバル経済など、瞬時に変化が広がる時代の速度に対応して、最適なデザインの解を見出し、社会動向を反映していくためには、建築家は複合的なファシリテーターとなる必要があると思います。その仕事においては、トップダウンではなく、チームに関わる最適なメンバーをキャスティングして、その人々の能力を引き出して制作していくことが重要です。それによって、サイン・グラフィックからコミュニケーションのデザインまで、統合的かつ効率的にディレクションすることができ、最終的に良いモノができると感じているのです。それを私は、co-lab という場で行っていると考えています。そしてこれからも、新しいファシリテーター型の現代の建築家を目指していきたいと思います。 ※ co-lab ホームページ：http://www.co-lab.jp

### 同級生の眼

天島 芳彦 OSHIMA, Yoshihiko  
26 回生 株式会社ブルースタジオ 専務取締役  
／プロジェクト執行統括部本部長

田中陽明が語る「ファシリテーター」という在り方。思い返すと、彼自身はこの表現方法を知る以前の武蔵美時代からファシリテーターであったのではないか。多様な人間をひきつけ、異なるポテンシャルを理解し解釈し、異なるもの同士を繋ぎ合わせ編集する事によって新たなモノや出来事を創り上げる。卒業制作も、私達が自宅にこもり睡眠もとらずストイックに黙々と作業を続けているさ中、彼は様々な人間とコンタクトをとり飛び回っていた。発表の目にしたのは正に一人では達成し得ないスケール感とリアリティーのあるフルスケールの作品だった。物（ハードウェア）の時代から物語（ソフトウェア）の時代へと大きく変化したバブル経済崩壊後の価値観。その変化の渦中に社会に放り込まれた私達の世代。武蔵美出身トリオを中心とする私達ブルースタジオも、モノのデザインを超えたプロセスやコンテンツのデザインを標榜し、建築を中心にアート、マーケティング、不動産、広告の要素を取り込み、全てを同等にデザインする事を目指している。同じ時代を生き、着想し創造する仲間としてこれからも田中陽明の行動には目が離せない。



co-lab メンバーの一部（写真提供：日経アーキテクチャー）



### 目次

フォルマ・フォロ エッセイ  
野沢 正光

インタビュー  
土屋 公雄

卒業生の素顔  
田中陽明

製図室 /  
国際交流プロジェクト：  
ベルリン芸術大学ワーク  
ショップ  
井上 裕依子

表紙写真：  
リバー・プロジェクト 2008  
写真提供：武蔵野美術大学建築学科研究室



## 武蔵美と私

野沢 正光 NOZAWA, Masamitsu  
武蔵野美術大学客員教授

私にとって武蔵美は馴染みのある大学でした。高校生の頃国分寺に住んでいましたが、国分寺駅の南に喫茶店があり、武蔵美を含む美術系の大学生がアルバイトをしていました。コーヒーを入れるのはいつも同じ画学生で、中の一人は特によく覚えていました。もちろん女性で、油絵を学ぶ人でした。その店では年末にパーティもあり、経営者も絵を描く人でしたが、そこで背伸びして話題についていくことが楽しかった記憶があります。

当時武蔵美は吉祥寺キャンパスが手狭になり、鷹の台キャンパスを作り始めた頃でした。雑誌に芦原義信氏設計のグリッド状のアトリエ棟が掲載され見に行きました。畑の中にささやかに産声を上げた姿でした。私は大学受験の浪人時代を阿佐ヶ谷美術学園という予備校で過ごしました。原広司、宮脇檀が私達の先生でした。原さんから幾つかのパーツの組み合わせで立体を構成するルールを示すパズルを提示してくれたことや建築家を目指すことを勧められたことを、宮脇さんは教壇に腰をかけチョコレートを食べながらの授業やそのかっこいい姿を記憶しています。ここから武蔵美の建築の第一期生になった友人もいます。

昨年から客員教授として武蔵美に迎えていただき、足を向けることが多くなりました。美術大学での建築教育がこれから抱える宿題は大きいと思います。ここで学び考える学生に、充実した時間を経験してもらいたいと思っています。

## アートと建築のつながる場所

土屋公雄 TSUCHIYA, Kimio  
武蔵野美術大学客員教授  
愛知県立芸術大学教授



武蔵美建築学科研究室にて（写真提供：青山恭之）

### ＜「所在」についての問い＞

大学では建築デザインを勉強しました。卒業後自分が建築の方に行くべきか確信がなかったので、少し時間をとって考えてみたいと思いました。若い頃はここの後どうやって生きていくのか、なかなか見えない。その時期に夏目漱石に出会いました。漱石の「倫敦塔」という作品に、「凡そ世の中に何が苦しいと云って所在のない程の苦しみはない」という文章があります。所在とはいわゆる在所という物理的な場所を指すものではなく、人間の内側の帰るところ、つまりアイデンティティというものに繋がりますが、それを持っていない人間は一番悲しいのだ、というように私は解釈します。旅に出るのが好きで、アルバイトしながらお金を貯めて、学生時代から外国に出かけていました。向こうの人たちに「国籍はどこ？」と聞かれ、何も考えずに「私は日本人です」と答えていました。そのうち本当に日本とは自分にとって何だろうということ異国で考えるようになり、漱石の「所在」の問題も含めて、「自分はいったい誰なのか」

という問いかけがどんどん膨らんでいったのです。私は基本的にアートに興味があり見てはいましたが、現代美術をきちんとアカデミックに学んでいなかったのが最初はよくその表現の意味が分かりませんでした。しかし眼の前に広がっているものは理解できないのですが、ギャラリーや美術館の空間がとても気持ちよく感じられました。そのうち何故作家はこういう作品を造るのか、その背景が知りたくなって、現代美術を学ぶようになりました。美術を通して「自分とはいったい誰なのか」を問うこと、美術というものがそういった問いへの媒体になっているということを理解するようになり、更に美術に傾倒して行きました。倉俣史朗さんとは、学校でお会いしてから、亡くなるまでお付き合いさせていただきました。倉俣さんの事務所に行くところ、君は建築やデザインの世界じゃないね。アートの世界ってこういう世界だよ」という話をさせていただきました。事務所にはデザインよりもアートの本が多くて、僕は倉俣さんの蔵書を見せてもらいヨーゼフ・ボイスやアルテ・ボーヴェラを知ったし、田中信太郎など現代アーティストとも出会ったのです。

そんな中ぜひ外国で勉強してみたいと思い、30歳を過ぎてからロンドン芸術大学大学院のチェルシー・アート・カレッジに進みました。僕は30歳を過ぎていたけど年齢的には真ん中ぐらいで、40代の人もしました。印象的だった授業で、「毎日必ず1点作品を完成させなさい」という課題がありました。前の日に作った作品を次の日に継続して展開させてはいけない、まったく別の新しいものを作るという条件つきで、約40日間の制作でした。最初の一週間は自分のポケットからいろんなアイデアが出てくるのですが、10日もたつともう出て来なくなるのです。それでもなんとか絞り出す。一日24時間ずっと作品のことを考えているようになり



「時の知層」 土屋公雄（写真提供：土屋公雄）

ます。最後に自分の前に全部の作品を並べるのですが、約40点の作品を客観的に俯瞰すると、自分では全く別個の作品を作ったと思っていたものの中に、ある共通項が見えてくるのです。まさに自分の中の自分というものを映し出す鏡のように自己に知らしめた貴重な経験でした。近代の日本の彫刻というのはどこか西洋から入って来たものの垂流として捉えられていた感じがありましたが、80年代ぐらいに入り日本の経済が力を増すにつれ、日本の現代美術も海外から注目をされるようになりました。僕は非常にラッキーだったのですが、アメリカで初めての日本の現代美術展として巡回した「プライマル・スピリット」という展覧会にノミネートされて、川俣正、戸谷成雄、遠藤利克等のアーティストたちと共に巡回することができました。それから様々な展覧会から声が协かるようになり、30代はほとんど海外を拠点に作家活動をしてきました。90年代に入って、今でいうと

環境彫刻ということになるのでしょうか、美術館の外で制作するようになっていきました。90年代は美術館からアートが出て行く時代、つまり一部の美術愛好家が建物の中で作品と向き合っている状況が変化して、アートや演劇などが地域の中に入っていた時代です。従来の野外彫刻というオキモノ彫刻というか、ここに存在する必然性がどこにあるの？という作品が多く、僕はずっと疑問を持ってきました。場所と彫刻との関係がこんな希薄でいいのか。彫刻と場所の関係性、あるいは地域や歴史・風土との関係性といったこと、自分が作品をつくる場合には「そこでしか成立しないもの」「その場所に深く根ざしたもの」を創っていきたいと思いました。場と向き合いながら作品を創っていくというのは、ある意味で建築と結びつくことであり、僕の中では、建築とアートというものがもっと融合したかたちで関係を持てないかと考えてきました。

### ＜リバー・プロジェクト＞

この春3月に、チェルシー・アート・カレッジと武蔵野美術大学の合同ワークショップを開催しました。このプロジェクトは3年ぐらい前から考えていたのです。今までの国際交流は、学生個人が交流のある大学に留学し、1年間滞在して帰ってくるといった個人ベースのもので、本人しか海外で学べないという事が閉鎖的だと思いました。もっと開かれたかたち、例えばゼミ単位で大学の授業に参加できないかと考えました。僕自身も海外の大学で学び、芸術という目標に向かって世界各国から来た人間と切磋琢磨し、お互いの文化や考え方の違いについてディスカッションし、価値観の違いについてもものを認め合う事を学びました。武蔵美の学生たちにもぜひそういう体験を持ってもらいたいと思いました。2006年に武蔵野美術大学とロンドン

芸術大学が国際交流協定締結校という運びになり、チェルシー・アート・カレッジのヘッドも日本に来られ、国際交流ワークショップの企画を膨らませました。まず最初は日本からイギリスに行くということになりました。武蔵美は学部生、大学院生と卒業生で計11名、そして高橋晶子先生、研究室の西尾さんと僕というメンバーで渡英しました。チェルシーはスペース・デザインのコースの学科長であるケン・ワイルダー氏と大学院の25名の学生に参加してもらい、総勢36名の学生によるワークショップとなりました。テーマを考えるにあたっては、お互い先進国ではありますが、地域毎に背景も違い、共有事項という点では神経を使いました。世界の主要都市の真ん中には大きな川が流れているというの、ある意味で建築と結びつくことであり、僕の中では、建築とアートというものがもっと融合したかたちで関係を持てないかと考えてきました。

ロンドンの学生たちは世界各国から来ていて、25人中イギリス人は3人しかいないという正に国際的な状況で、そこに日本人が入っていても全然違和感がなく、我々もチェルシーの学生になってしまうような感覚でした。事前に武蔵美の学生は隅田川のリサーチをして、江戸時代ぐらまで遡って、東京というのはどういう街であり、国際都市になるまでの様なプロセスを経てきたか、川が果たして来た役割について、東京オリンピックを機に高速道路が建設され街が変わっていった状況などをプレゼンテーションしました。チェルシー側は、テムズ川の歴史をケン・ワイルダー先生がレクチャーしてくださいました。そしてまず現地調査から始めました。

最初の日には船に乗ってテムズ川を下り、船からテート・モダンやミレニウム・ブリッジなど色々なものを見つ、時々下船して調



チェルシー・アート・カレッジにて  
（写真提供：武蔵野美術大学建築学科研究室）

査をしていったのです。今回は36名の学生をシャッフルし、1チーム5〜6名を5組作り、学生たちの自主性に委ねるかたちでチーム毎に行動させるようにしました。最初の内は全体で行動していましたが、徐々にそれぞれのチームに分かれて動き始め、夕方前にはチーム毎に教室に戻り「何をやるのか」ということでディスカッションが始まりました。どうしても英語がわからないという人は助手の西尾君に通訳してもらっていましたが、しばらくするとスケッチや、その他のコミュニケーション・ツールを駆使して自由にコミュニケーションを取り始めました。

2日目からは各チームでのリサーチに入りました。ロンドンでは一歩外へ出ると人種問題や貧困など、日本であまり経験しない問題も見えてきます。例えばテムズ川の南側と北側では実はある種の人種格差があり、南のほうにいくとワーキングクラスの人たちが多いという政治的状況があるのです。武蔵美の学生たちも行動していくうちに、このエリアはアラブ人が多いとかインド人が多いなど気づいていったし、様々な事実を彼ら自身が見出した事はよかったと思います。テムズ川には船の中で生活しているポート・ピープルたちがいますが、あるチームはそういったポート・ピープルをリサーチし、実際にポートに

入り話をきき、そこでの生活を学びました。東京では想像し得ない文化・歴史・政治の違いを体感したと思います。短期間でしたが、濃厚な凝縮された時間のなかで成果を出したと思います。僕のゼミの卒業生である越後君がチェルシーの研究生であり、大変力になってくれました。

制作中は日本の学生がリーダーシップをとってひっぱっていく姿も見られました。制作だけでなく、武蔵美の学生たちが英語でプレゼンテーションする原稿を一生懸命現地の学生と相談しながらつくっていました。自分の言葉で発表する彼らの勇気というものは本当に嬉しかったです。この経験で学生たちは自分の実力を確信できたし、大きな自信になったと思います。

同時に自分自身に不足しているものも自覚する機会になったと思います。向こうの学生は手がよく動き、のんびりと構えて考えているよりも手と頭の間でイメージしていくというプロセスを体得しています。そのことを武蔵美の学生たちにも気づいてもらえました。

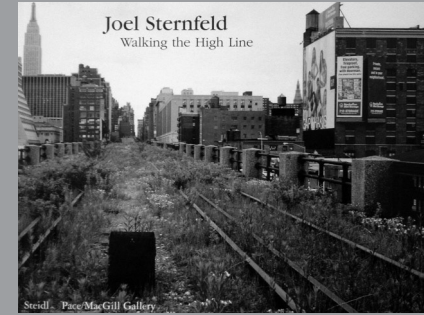
### ＜価値観が多様化している時代に＞

今度僕はニューヨークに行こうと思っています。マンハッタンのハドソン川沿いにハイラインという運送用の鉄道が走っていた高架橋があります。1920年代に造られたもので、鉄道が車に取って代わってから使われなくなって、放置され草ぼうぼうになっています。2002年にこの高架橋を壊して跡地を経済的に活用しようということになりました。しかし地域の人たちにとってハイラインはアイデンティティの一部であり、当時のデザインのしっかりした鉄骨造で、簡単に壊れるものではありません。沿線にはチェルシーのギャラリー街やアートセンターがあり、若い人や観光客たちが集まる場所になっています。

ニューヨーク市議会では取り壊すということになっていたのを、反対運動が起きて取り壊し中止となりました。デザインコンペをして、ここをどのように再生し経済効果を出して行くかということになりました。若い建築家がコンペに通り、ここをパブリックスペースにする計画が通ったのです。こういった再開発プロジェクトは世界中にあり、日本の建築家やアーティストたちもこういった問題を積極的に考えていかなくてはいけないと思います。

経済効率、機能といったことばかり優先する時代にあって歴史的な建造物が壊されて来たのを、地域住民やアーティスト、デザイナーや建築家によって守られたのは素晴らしい事です。価値観が多様化している時代にあって、社会における新しい価値や役割、環境やコミュニティの問題などを私達も積極的に考えていくべきです。

武蔵美の建築の学生は建築を学ぶと同時に美術も学んでいるから、領域横断的にこういったプロジェクトに関わって行くことができると思います。僕自身は建築専門ではないけれど、美術を中心におきながら領域を超えたところで建築学科に関わっていければと思っています。



書籍 "Walking the high line" by Joel Steinfield

### ＜若きアーティストたちへ＞

「この体験なき情報化の時代は、世界を水平に見るのではなく、個々を垂直に見る座標軸が必要である」（土屋公雄ブログより）

毎日情報の洪水のなかに生きてると、我々は自分を見失ってしまいます。自分にとってどの情報が大切かという見極めがないと、ただ受け入れるしか無く、どんどん自分が見えなくなってしまいます。

自分の両足で立っているのだという確認の意味でも、足元を掘ってみてほしい。縦軸と横軸の交わる所に常に立っていてほしい。僕はそれが今の時代を生きるバランス感覚だと思っています。武蔵美の学生たちにはそれが特でると思えます。

一学年80名ぐらいなので、卒業までに全員の名前は憶えられませんが、自分が関わった学生はこれからもしっかりと追っかけて行こう、見て行こうと思っています。ゼミの卒業生は一年に1回集まってくれますし、「たまには近況報告に来いよ。」と言っています。皆の将来を楽しみにしています。僕は教育という現場において、常に学生たちと実践的プロジェクトに関わっていきたいと思っています。

## 建築祭 2007~2008のご報告

青山恭之 AOYAMA, Yasuyuki  
14 回生 日月会会長、アトリエリング

建築祭 2007-2008 が、2008 年 2 月 28 日から 3 月 2 日、新宿のサテライトにて行われました。一年間の学生達の力作や、日月会会員の作品が、会場に集まりました。会期中に各賞の授賞式・レビュー・懇親会が行われ、多くの会員が現役の学生や先生方と語り合うことができました。

各賞のうち日月会に直接関係するものの結果は以下の通りでした。受賞者の方々、おめでとうございます。

芦原義信賞：大嶋信道（17 期）「建築虎の穴見聞録」  
小宮功（15 期）+ 笹口数（20 期）「ウズマクヒロバ」  
竹山実賞 ；小宮功（15 期）「ラセン」

日月会建築賞  
太陽賞：加藤ユウ・雨川美津季・堀江和未  
満月賞：風間貴志・平岡緑・川松寛之  
三日月賞：鈴木泰地  
新月賞：芝山雅子・橋本直樹

10 月 16 日には大学一号館において、「芦原義信賞」「竹山実賞」の記念講演会が行われました。まず小宮氏と笹口氏のコンビが、ロックフィルダム（南相木ダム）の下流につくられた環境・建築造形について、土木的なスケールから家具的なスケールまでの様々な広りのなかでの造形のプロセスを発表されました。続いて大嶋氏が、「新建築」の連載から始まったものづくりの現場のルポが一冊の本になり、さらに氏自身の作品のなかで活かされている様相について語られました。全学に開かれた講演だったので専門的に深入りすることなく、造形のエッセンスが自ずとにじみ出てくる話を聞くことができました。

日月会総会は、2008 年 3 月 16 日に佐奈建設株式会社にて行われ、決算・予算・事業計画等について議決されました。



建築祭 2007~2008 展示風景（写真提供：武蔵野美術大学建築学科研究室）